

# パネルディスカッション① 課題起点の開発を促進する

声にならない「困りごと」やニーズをすくい上げ、誰もが使いやすい製品を開発するには？「共創のプロセス」と、それを支える持続可能な社会の仕組みとは？について、開発企業、福祉事業者、研究員、それぞれの立場から議論します。



株式会社ケアウィル  
代表取締役  
笈沼 清紀 氏

16年間の会社員勤務を経て2019年に起業。20年にわたる家族介護の経験から、医療・介護現場における「衣服」の課題に着目し、デザインと機能を両立させた福祉製品の開発をスタート。当事者や専門職、研究者らとの共創による製品開発を行い、4年連続でグッドデザイン賞を受賞。製品導入先は全国130以上の医療・福祉施設に広がり、利用者は9,200名を超える。起業前は、新卒で日本総研、SMBC日興証券を経てKDDI、ジーンズ、楽天にて執行役員や管理職を歴任。学習院大学経済学部卒、米国Hult International Business School 経営学修士（MBA）。



特定非営利活動法人  
ケアウィル 理事長  
柴田 範子 氏

父は8歳で脊髄カリエスに。重度の障がいを抱え養鶏場を拡大した父。そんな父の側で育った。市のホームヘルパー活動中、お年寄りを地域の方々がリスクが高いと言う理由で、措置決定で特養入所。2日後にベッド上で亡くなったと報告を受けた。

どなたもが最期まで自分らしく馴染みの地域で暮らし続けられる小規模多機能型居宅介護ひつじ雲、GH障害者ひつじ雲を目指している。若い学生たちにも「自立とは」を伝え続けてきた。



国立研究開発法人  
産業技術総合研究所  
人工知能研究センター  
主任研究員  
北村 光司 氏

子どもや高齢者の傷害予防や福祉機器の評価に関する研究の従事。特に事故データの分析、センサなどを用いた事故原因の究明や対策に関する検証などを実施。また、高齢者の行動特性データの収集・分析技術の開発、福祉機器使用時の高齢者の動作評価など、データにもとづいたアプローチの研究を実施。川崎WELTECHの運営やKIS認証にも携わる。

## パネルディスカッション② 「協力」を仕組みに変え、共創の場をつくる

福祉の現場で見えてきた課題を、若い世代や企業の新たな視点と結びつけ、社会的な価値へとつなげる方法を探ります。共創が意図的な仕組みになって、誰もが共創の担い手となって支え合える地域の未来を考えます。



国立大学法人  
東京科学大学特別研究員  
栗林 詩歩未氏

京都大学大学院にて、リハビリテーションロボットの開発および実証試験に関する研究に従事し、博士号を取得。理学療法士として特別支援学校や医療福祉センターでの臨床経験を経て、2024年より東京科学大学の研究員に着任し、ウェルテック運営に参画。開発者と利用者の双方の視点を踏まえた助言や、科学的根拠に基づく製品評価手法の提案を強みとし、企業の製品開発・改良支援に取り組んでいる。



川崎市健康福祉局  
地域包括ケア推進室  
担当課長  
滝口 和央氏

川崎市役所入庁から、障害者福祉などに携わり、現場の声を反映した施策の策定などに取り組む。産業振興から福祉課題にアプローチするウェルフェアイノベーションにも携わった経験もあり、福祉現場の視点を持ちながら民間企業との対話を得意とする。区役所における地域包括ケアの実践も経験し、現職に至る。現在、地域包括ケアシステムの取組として地域の福祉課題に民間企業が事業としてアプローチする産福共創を推進。



公益財団法人川崎市産業振興財団  
ナノ医療イノベーションセンター  
コミュニケーションマネジャー  
プロジェクトCHANGE  
副プロジェクトリーダー  
島崎 眞氏

川崎市出身。大学院薬学研究科修了後、大学教員として天然物医薬品化学に関する研究・指導に従事。その後、製薬企業の研究部門に転職し、創薬化学のグループリーダーを務める。研究所の閉鎖に伴い広報部長を拝命。サイエンスベースの広報戦略を立案・実施。日本製薬工業協会の広報委員会副委員長としても医薬品業界の価値創造に努める。iCONM入職後はコミュニケーションマネジャーとして広報業務の他、異文化交流に努める。